

平安京左京八条二坊九町跡 発掘調査報告書

2025年

特定非営利活動法人平安京調査会

例 言

- 1 本書は京都市下京区七条通東堀川西入八百屋町2、3、11、19で実施した、平安京左京八条二坊九町跡の遺跡発掘調査報告書である。(京都市番号 24H455)
- 2 調査はホテル新築工事に伴い実施した。
- 3 現地調査は第一リアルター株式会社から依頼を受けた、特定非営利活動法人平安京調査(以下、「平安京調査会」という)に委託され、吉崎 伸が担当した。
- 4 調査期間は令和7年9月29日から10月17日である。
- 5 面積は171.5㎡である。
- 6 本文、図中で使用した調査位置図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1:2,500)「島原」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は吉崎 伸が行った。
- 10 現地の記録写真撮影は吉崎 伸が行い、出土遺物の撮影は九鬼みづほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。

〔発掘調査〕吉崎 伸(平安京調査会)
作業員(やましろ文化財株式会社)
〔整理作業〕株式会社コンピュータ・システム、平尾政幸
- 13 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年による。
- 14 本調査の検証審査員は國下 多美樹 龍谷大学文学部教授である。
- 15 発掘調査、整理作業において、下記の方からご指示ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

(敬称略) 鈴木久男 京都産業大学客員教授

目 次

第Ⅰ章	調査の経緯	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査経過	1
第Ⅱ章	遺跡	4
1.	周辺環境	4
2.	既往の調査	4
第Ⅲ章	遺構	7
1.	基本層序	7
2.	遺構	8
	東区の遺構	8
	西区の遺構	11
第Ⅳ章	遺物	14
1.	土器類	14
2.	金属製品	14
3.	石製品	15
第Ⅴ章	まとめ	17

図 版 目 次

図版 1	遺構 1. 東区平面オルソ画像(左が北)
図版 2	遺構 1. 東区全景(西から) 2. 溝 200(西から) 3. 柱列 204・207(東から)
図版 3	遺構 1. 井戸 201(南から) 2. 土坑 221(西から) 3. 西区拡張部(南から)
図版 4	遺構 1. 西区平面オルソ画像(上が北)

- 図版 5 遺構 1. 西区全景(南から)
2. 井戸1(東から)
3. 土坑7(西から)

図版 6 遺物(土器類)

図版 7 遺物(土器類)

図版 8 遺物(土器類・石製品・金属製品)

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:5,000)	1
図 2	調査区配置図(1:400)	2
図 3	調査経過写真	3
図 4	溝 200実測図(1:50)	8
図 5	東区平面図、北壁・東壁断面図(1:100)	9
図 6	柱列 204・207実測図(1:40)	10
図 7	井戸 201・土坑 221実測図(1:50)	10
図 8	井戸 1・土坑 7実測図(1:50)	11
図 9	西区南壁・西壁断面図(1:100)	12
図 10	西区平面図(1:100)	13
図 11	遺物実測図(1:4)	15
図 12	調査区条坊復元図(1:200)	18

表 目 次

表 1	既往調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	14
表 4	遺物観察表	16

第 I 章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯 (図1)

調査地は京都市下京区七条通東堀川西入八百屋町2、3、11、19に所在し、平安京左京八条二坊九町跡に該当している。ここでホテル新築工事計画が持ち上がったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、平安京に関すると思われる遺構が検出されたため、土地の所有者である第一リアルター株式会社に発掘調査の指導がなされた。指導を受けた第一リアルター株式会社は特定非営利活動法人平安京調査会に調査を委託し、委託を受けた平安京調査会が担当して発掘調査を行った。

2. 調査経過 (図2)

調査は令和7年9月26日に調査区の設定など事前準備を行った。調査区は試掘調査の結果、遺構の残りがよいと判断された調査区の西側と東側に二か所に調査区を設けた。当地は平安京の七条大路と堀川小路の交差点が推定される場所でもあり、この交差点部分を確認するための配置でもある。

週明け 29 日に西側の調査区（西区）106.5m²の重機掘削を開始した。なお西区は北側が敷地の

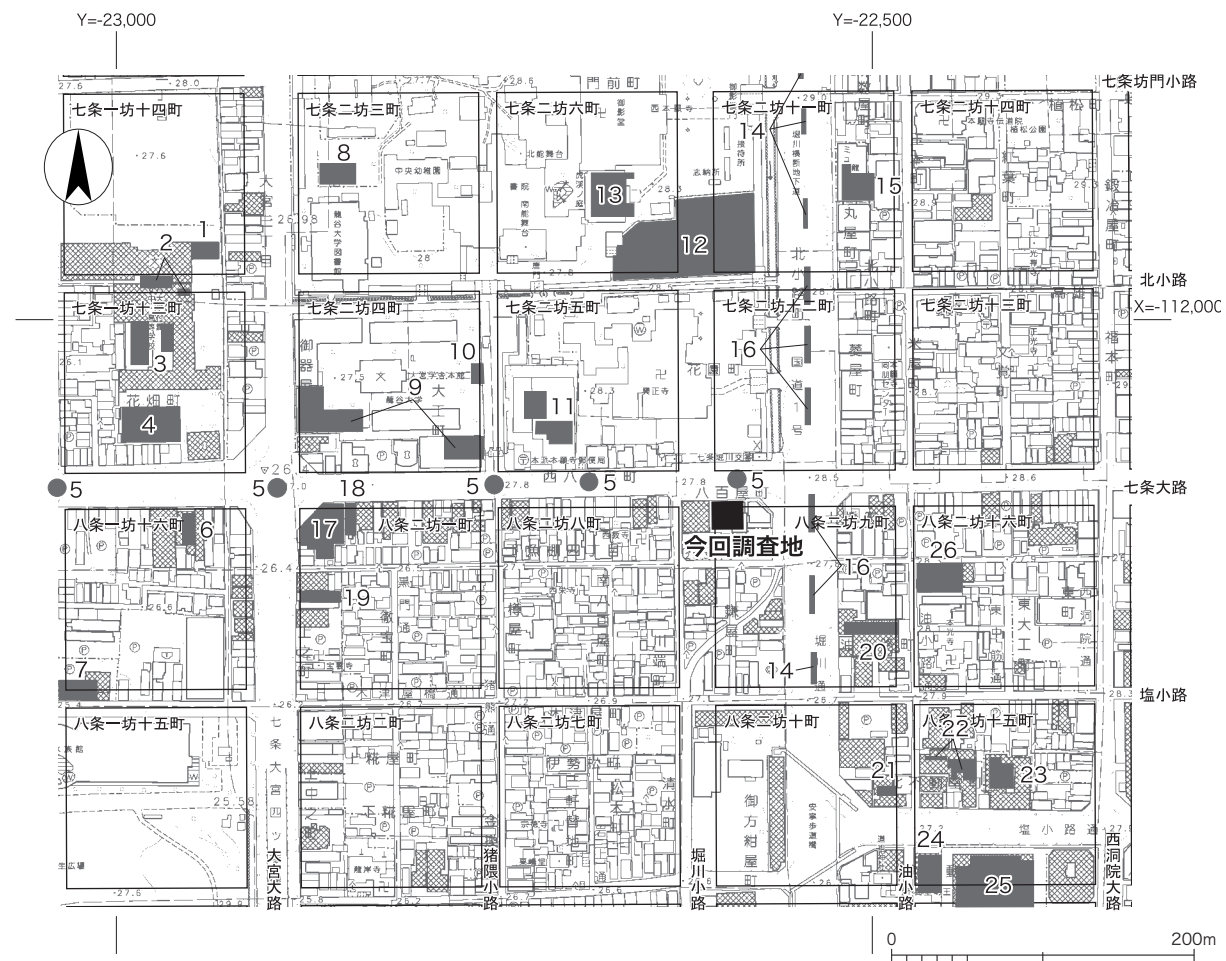


図1 調査位置図(1:5,000)

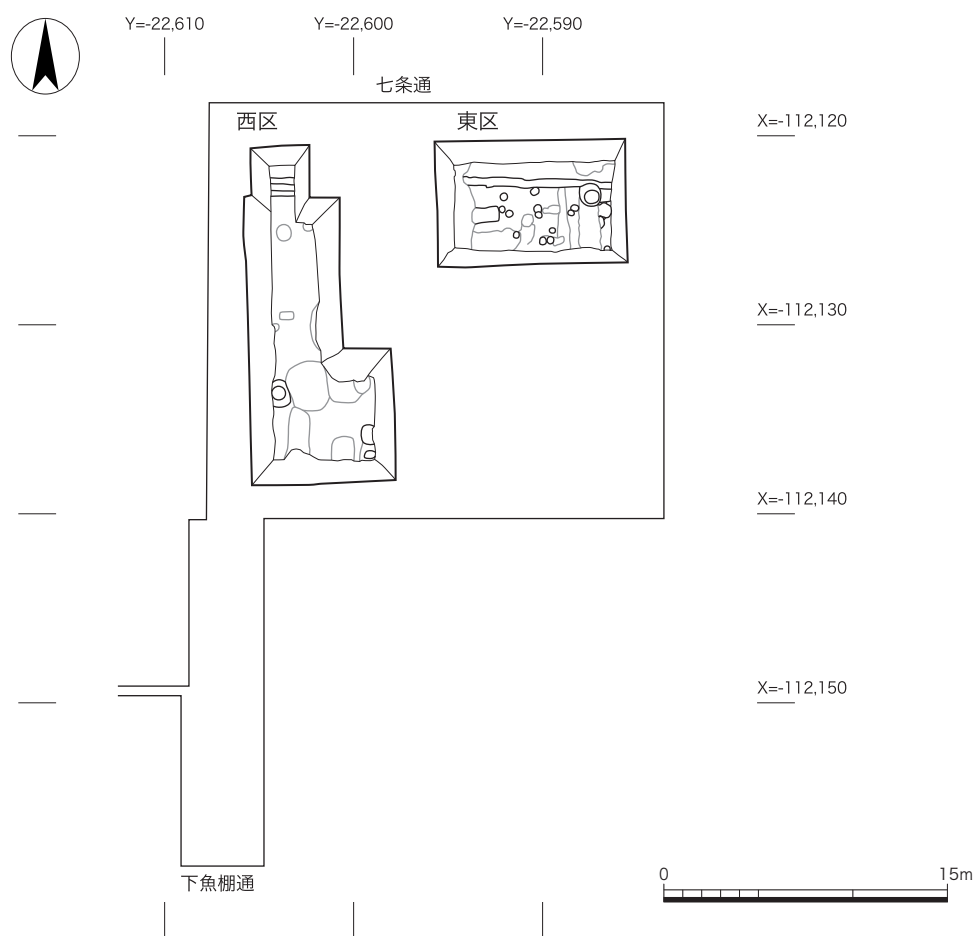


図2 調査区配置図(1:400)

出入口となっているため、その部分の南北3m分については調査の最終段階に拡張区として調査することにした。重機掘削の結果、調査区の大半が近世の湿地状堆積と整地層であることが判明した。遺構の残存状況は良くなかったが、近世の井戸、中世の土坑などを検出した。遺構掘削、記録作業を行い、10月6日には調査を終了し、埋め戻しを行った。引き続き、東側の調査（東区）65㎡の重機掘削にはいった。東区も本来の遺構面である堆積層が攪乱を受けており、調査区の大部分が地山である砂礫層の上面で遺構を検出する状況となった。ここでは鎌倉時代の溝、柱穴列、井戸、土坑などを検出することができた。この内、調査区の北側で検出した溝200は七条大路の南側溝と考えられる。遺構掘削、記録作業を行い、10月14日には東区の調査を終え、埋め戻しを行った。10月15日には西区の北側（拡張区）の重機掘削を行った。ここでは東区から続く七条大路の南側溝である溝の続きを検出した。遺構掘削、記録作業を行い10月16日には拡張区の調査を終え、埋め戻しを行った。その後、調査地全体の整地、調査機材の撤去を行い。10月17日には作業を終えた。調査の記録についてはドローンによる3D撮影と手描きによる実測を併用して行った。

また、調査の各節目では京都市文化財保護課及び検証委員である龍谷大学文学部教授 國下多美樹氏の検査・指導を受けた。



1. 調査区設定



2. 重機掘削



3. 作業状況



4. ドローンによる3D撮影



5. 文化財保護課の検査



6. 検証審査委員の検査



7. 整地用碎石の搬入



8. 調査後の整地作業

図3 調査経過写真

第Ⅱ章 遺跡

1. 周辺の環境

調査地の北西、平安京左京七条二坊三～六町には平安京の経済拠点である東市が存在した。平安時代中期には市の東西南北にそれぞれ二町が外町として追加された。調査区のある八条二坊九町はその隣接地になる。東市は鎌倉時代前期まで市として機能していたが、下京・四条での立ち売りや七条町・八条院町の商業地が発展したため廃れていった。その後、本願寺が移転してきた天正年間には付近は原野が広がっていたといわれている。本願寺が造営されると付近には寺内町が広がり、当地もその範囲に含まれている。

文献に見る左京八条二坊九町は、平安時代末期に九町の北東部の一部を散位藤原経則という人物が所有していた。彼が長承二年（1133）の火事で焼失した証文を左京識に再発行を願ったことによる記事（平安遺文 二三〇一号）で判明している。また、町の南西部「八条二坊九町西一行北七門」の地は鎌倉時代中期の13世紀後半、使二郎入道から妻の尼妙心が受け継ぎ、正元元年（1259）に源友盛に売却した。さらに文永二年（1265）その地を正親御房が購入している（鎌倉遺文九二一九）（註1）。これらの状況から平安時代末期から鎌倉時代にかけて活発な土地利用がなされていたことをうかがわせている。

2. 既往の調査歴（図1・表1）

今回の調査区の位置する左京八条二坊九町内では、堀川通の共同溝設置にともなって調査が行われている（地点14・16）。これらの調査では平安時代中期以降の町の中央（西二行と三行の境）を南北に走る小径遺構が検出されている。また、平安時代中期以降から鎌倉時代の柱穴や土坑が多く見ついている。町の東側（地点20）では平安時代から近世にいたる5面にわたる油小路の路面と西側溝が確認されている。この内平安時代から鎌倉時代の西側溝は平安京の条坊に沿った位置にあるが、それ以降のものは東側（路面側）に0.8m程ずれていることが報告されている。

調査区の北西、左京七条二坊四・五町内では龍谷大学構内の校舎建設に伴う調査（地点9～11）が行われている。この内、地点11では鎌倉時代の鍛冶工房と建物跡、南北朝期から室町時代前半の地盤改良跡・区画溝・土坑、室町時代後半の地下式倉庫が検出された。また、本願寺移転に伴う坊官である下間家邸宅の建物や園池が検出されている。

調査区の南西、左京八条十・十五・十六町域（地点21～26）では平安時代後期から鎌倉・室町時代の遺構を多数検出しており、とくに炉跡などの遺構、埴埦や銅製品など鍛冶・鑄造に関する遺構や遺物が多数検出されている。これらは七条大路と町尻小路の交差点付近を中心として中世に展開される七条町に関連する遺構と考えられる。（周辺の調査の詳細については図・表を参照）

註1 古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』「左京と右京（左京八条二坊九町）」

表1 既往調査一覧表

地点	調査地条坊	検出遺構	調査報告書
1	七条一坊十四町	平安前期の井戸、鎌倉～室町の井戸	1976年 未報告
2	七条一坊十三町・北小路	近世から近代の耕作土	平安学園平安京跡遺跡調査委員会「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『研究論集』第41号、平安学園教育研究会 1998年
3	七条一坊十三町	平安後期の井戸・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・溝、近世の耕作土	前田義明「18 左京七条一坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983年
4	七条一坊十三町	平安前期の井戸、鎌倉～室町の井戸、室町～桃山の溝、江戸の建物・井戸・溝	平安学園考古クラブ『平安京東市外町の調査 - 平安京左京七条一坊十三町 -』平安学園平安中・高等学校 1986年
5	七条一・二坊・七条大路	平安後期の七条大路北側溝、鎌倉～室町の溝、江戸の柵、近世の井戸・土坑、近世から現代の埋甕・溝	上村和直「16 平安京左京七条一・二坊、東市跡」京都市埋蔵文化財研究所『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2011年
6	八条一坊十六町	平安末期～鎌倉の井戸・土坑・整地層、鎌倉の井戸・土坑・埋甕・柱穴群、鎌倉～室町の井戸・土坑・埋甕・柱穴群、安土桃山～江戸の落込・井戸・土坑・石垣跡・整地層	京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京八条一坊十六町跡」京都市埋蔵文化財研究所 2013-6 2014年
7	八条一坊十六町	平安前期の井戸・柱穴・土坑、平安後期の柱穴・土坑、鎌倉～室町の塩小路側溝・櫛笥小路側溝・石敷遺構・井戸・柱穴・土坑・埋甕・炉、近世から近代の井戸・土坑・柵・溝	関西文化財調査会『平安京跡発掘調査報告 - 左京八条一坊十八町 -』2004年
8	七条二坊三町	平安中期の溝、平安後期～鎌倉の井戸、江戸の本願寺と町屋境の南北溝・井戸・土坑、江戸後期の建物	京都市埋蔵文化財研究所『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-1 2008年
9	七条二坊四町	平安の大宮大路東側溝・井戸、室町の井戸、江戸の瓦溜	網干善教『龍谷大学構内発掘調査報告書 - 大宮学舎西翼・清和館建設の伴う事前調査 -』1980年
10	七条二坊四町	近世の瓦溜・礎石・土坑	網干善教『重要文化財 龍谷大学正門 - 解体修理にともなう事前発掘調査報告』龍谷大学校地学術調査委員会 1977年
11	七条二坊五町	平安前期の井戸・「厨」銘土師器、平安～鎌倉の井戸・土取土坑	龍谷大学『平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』2018年
12	七条二坊六・十一町	江戸の庭園遺構（滴翠園）	近藤知子「平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」京都市埋蔵文化財研究所『平成8・9・10・11・13・14年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1998・1999・2000・2002・2004・2004年
13	七条二坊六町	平安後期～鎌倉の土坑・溝、室町の井戸、江戸前期の柱穴・土坑、江戸中期～後期の建物・井戸・瓦列・土坑	京都市埋蔵文化財研究所『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市跡）』京都市埋蔵文化財発掘調査報告 2007-18 2008年
14	七条二坊・九・十・十一町、八条二坊九町	平安前期から中期の土坑・柱穴、平安の井戸・土坑・柱穴、鎌倉前期の七条坊門小路北側溝	平安京調査会 小森俊寛・原山充志「8 平安京左京七条二坊・八条二坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度 京都市埋蔵文化財発掘調査概要』1989年
15	七条二坊十一町	平安前期の土坑・溝、平安後期の井戸・掘立柱建物・溝、平安後期～鎌倉の井戸・整地跡・土坑・溝、鎌倉の井戸・溝（東市外町に伴う）、中世後期の整地層、中世末～近世の井戸・土坑	文化財支援センター『平安京左京七条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 - 龍谷ミュージアム建設に伴う発掘調査 -』龍谷大学 2010年

表1 既往調査一覧表

地点	調査地条坊	検出遺構	調査報告書
16	七条二坊十一・十二町、八条二坊九町	平安前期の北小路両側溝・路面、平安後期～鎌倉の土坑、江戸以降の井戸	平安京調査会 小森俊寛・原山充志「7 平安京左京七条二坊・八条二坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度 京都市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年
17	八条二坊一町	平安前期の井戸、平安後期～鎌倉の七条大路南側溝・大宮大路東築地内溝、平安後期～鎌倉の礎石建物・井戸・土坑・埋甕、	龍谷大学『平安京跡左京七条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 - 龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査 -』2009年
18	八条二坊一町	平安後期～室町の七条大路南側溝、平安後期の土坑、鎌倉～室町の建物・土坑	平安京調査会 1976年 未報告
19	八条二坊一町	平安の大宮大路東築地内溝、平安前期の井戸・柵列柱穴群、平安～中世の整地跡・土取土坑・柱穴群・溝、中世末～近世の整地跡・土坑・柱穴群、近世末～近代初頭の土坑・炉	文化財支援センター『平安京左京七条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書 - 龍谷大学大宮学舎白亜棺建設に伴う発掘調査 -』龍谷大学 2011年
20	八条二坊九町	平安～近世の油小路西側溝・路面、平安の整地層・柱穴・土坑、鎌倉～室町の井戸・柱穴・土坑	上村和直・久世康博「8 平安京左京八条二坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度 京都市埋蔵文化外調査概要』1988年
21	八条二坊十町・油小路	平安～室町の油小路西側溝・路面、平安後期の井戸、平安の杭列・柱穴・土坑、平安末期～鎌倉の井戸・土坑・溝、室町の土坑・溝、近世の整地層	堀内明博「15 平安京左京八条二坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和57年度 京都市埋蔵文化外調査概要』1984年
22	八条二坊十五町	平安後期～室町の柵（四行八門制関連）・路面（辻子）、平安中期以前の建物・柵・土坑、平安後期～鎌倉の井戸・柵・土坑、平安の整地層、室町の建物・柵・井戸・土坑・埋甕・炉、江戸の耕作土層、室町の鑄造関連遺構・遺物	京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京八条一坊十五町跡」京都市埋蔵文化財研究所 2003-17 2004年
23	八条二坊十五町	古墳後期の建物・柱穴、鎌倉後期～室町前期の建物・柵列（四行八門制関連）・土坑・溝、安土桃山～江戸前期前葉の建物・柱穴群・路面（東中筋通）・東側溝（天正地割）、江戸前期中葉～末の建物・柵・土坑、江戸後期前葉の土坑・溝、江戸後期後葉の建物・柱穴・土坑・溝、近世の耕作土層	国際文化財株式会社 西日本支社『平安京左京八条二坊十五町跡』2016年
24	八条二坊十五町・八条坊門小路・油小路	平安中期の園地、平安後期～鎌倉の井戸・柱穴群・土坑・炉、室町の井戸・柱穴群・土坑・炉、江戸の耕作土層、近世の井戸・土坑・溝	日開調査設計コンサルタント『平安京左京八条二坊十五町跡』株式会社日開設計コンサルタント文化財調査報告書 第1集 2007年
25	八条二坊十四・十五町	平安後期～鎌倉の八条坊門小路両側溝・路面、鎌倉後半から室町の八条坊門小路両側溝・路面・井戸・竈・柱穴・土坑・埋甕・炉、室町前半の井戸・柱穴・土坑・墓、江戸後半以降の井戸・土坑・堀・溝、江戸の耕作土層	鈴木廣司「7 平安京左京八条二坊2」京都市埋蔵文化財研究所『平成9年度 京都市埋蔵文化外調査概要』1999年
26	八条二坊十六町	平安の池状落込・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴、江戸の井戸・土倉（地業）・土坑墓	木下保明「15 平安京左京八条二坊」京都市埋蔵文化財研究所『昭和62年度 京都市埋蔵文化外調査概要』1991年

第Ⅲ章 遺構

1. 基本層序（図5・9）

東区の基本層序は地表から約1.2mまでは建物を解体した際の現代盛土で、その下に黄灰色粘質土（粗砂混）0.2m、暗灰黄色粘質土0.25m（地山）、明褐色砂礫（地山）と続く。本来この調査区の遺構は黄灰色粘質土（粗砂混）（図5－3層）の上面で成立していると考えられるが、この層が残存しているのは調査区の南東部の一部に限られる。調査区の大部分はその下の明褐色砂礫層（図5－6層）の上面まで攪乱を受けており、今回検出した遺構の多くはこの砂礫層の上面で検出した。

一方、西区の基本層序は地表から約1.5mまでは東区と同様の現代盛土、その下には江戸時代後期の整地層が合わせて1.2mある。この中には土間を形成している焼土を固めた層（図9－7層）やタタキ面（図9－9層）などが認められる。さらにその下にオリーブ黒色粘土（図9－25層）などの湿地状堆積層が0.7m堆積している。その下層は明褐色砂礫（地山）となる。調査区で検出した遺構はすべて地山である明褐色砂礫の上面で検出した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代末期 ～鎌倉時代	溝200・300・301、柱列204・207、井戸201、土坑7・221	溝200・300は七条大路南側溝
江戸時代後期	井戸1	

2. 遺構

東区の遺構（図5、図版1・2-1）

東区では平安時代末期から鎌倉時代の柱列、井戸、土坑、溝などを検出した。

溝 200（図4、図版2-2） 調査区の北側で検出した東西方向の溝である。幅0.5m、深さ0.1m、延長8mに渡って検出した。埋土は、オリブ黒褐色砂泥層で平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土している。出土遺物は土師器の皿が主であるが、小片で図示できなかったものの埴塼やふいごの羽口の破片が含まれている。また、この溝はその位置から七条大路の南側溝と考えられる

柱列 204（図6、図版2-3） 溝200の南側で検出した東西2間の柱列である。柱間は1.95m、各柱穴は径0.3～0.4mの円形で、深さは0.1～0.15m、柱痕跡は径0.15mを測る。柱穴からは鎌倉時代の土師器などの小片が出土している。

柱列 207（図6、図版2-3） 柱列204に並んで検出した柱列で2間分を確認した。柱間は1.6～1.7m、各柱穴は径0.35mの円形で、深さは0.1～0.15m、柱痕跡は径0.1～0.15mを測る。柱穴からは鎌倉時代の土師器などの小片が出土している。なお、柱穴の重複関係から柱列204よりも新しく、柱列204の建て替えでの可能性がある。

井戸 201（図7、図版3-1） 調査区に東側で検出した井戸で、井戸側などは確認できなかった。径1.1m、深さ1.0mで、底部の中央部分が径0.75m、深さ0.2mほどのくぼみとなっている。底部に何らかの水溜施設があったものと考えられる。埋土は2層で上層から黒褐色砂泥（やや粘質）、黒褐色砂礫である。底部から銅製の火箸が1本出土している。

土坑 221（図7、図版3-2） 調査区の西部で検出した方形の土坑である。東西1.5m以上、南北0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は2層で上層からオリブ黒色細砂、黒褐色細砂で鎌倉時代の土師器が少量出土している。

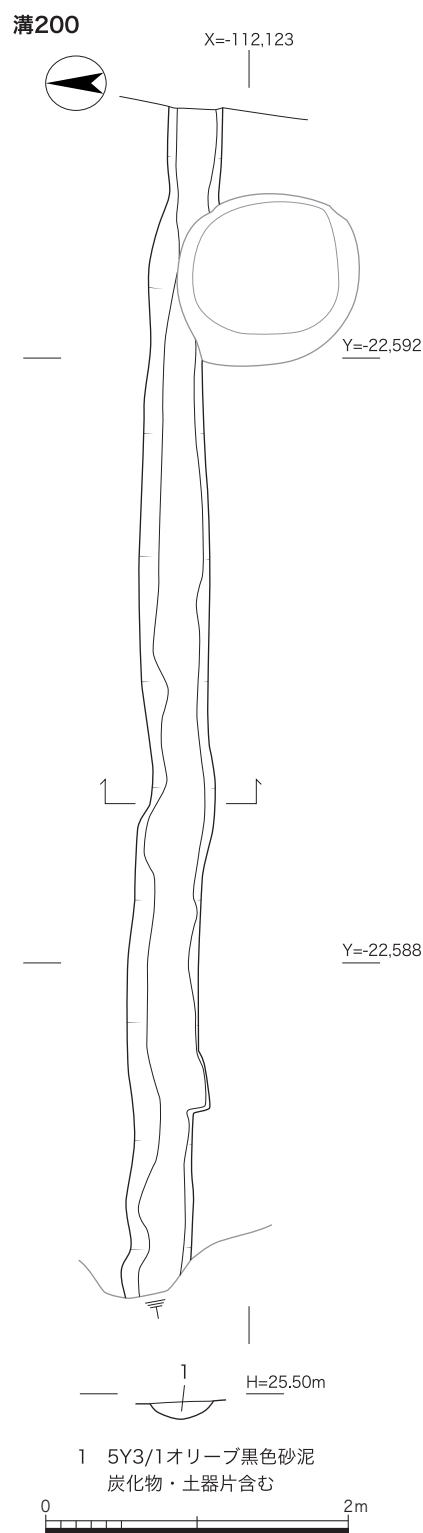
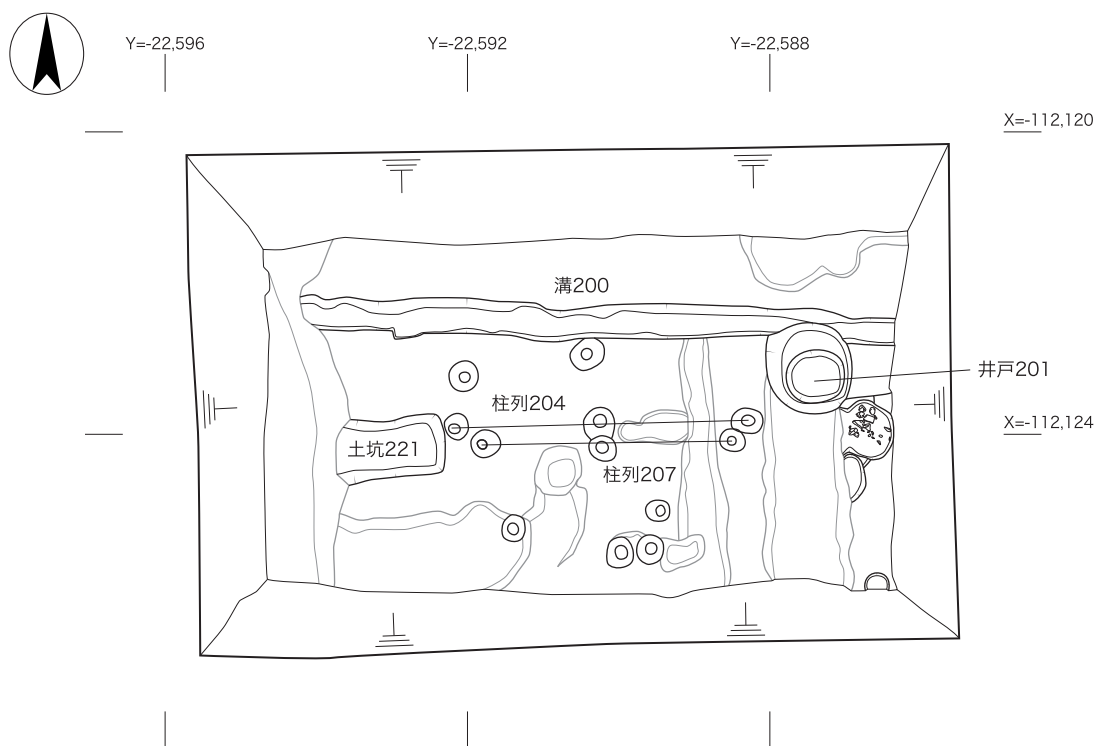
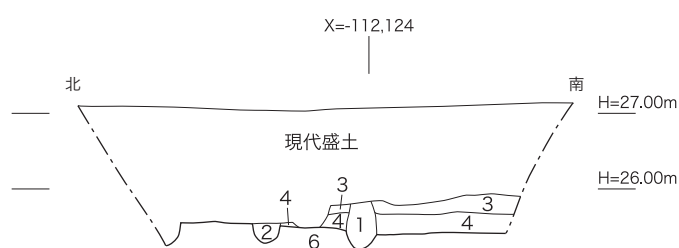


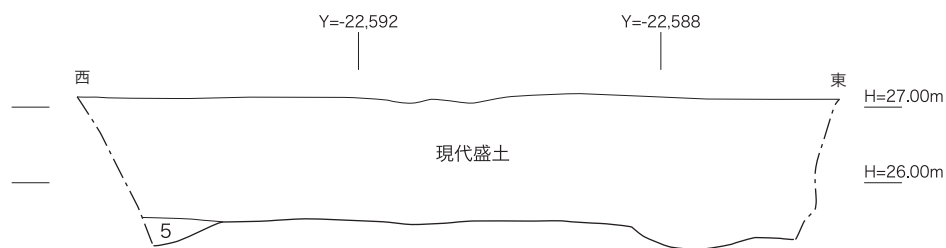
図4 溝200実測図(1:50)



東壁



北壁

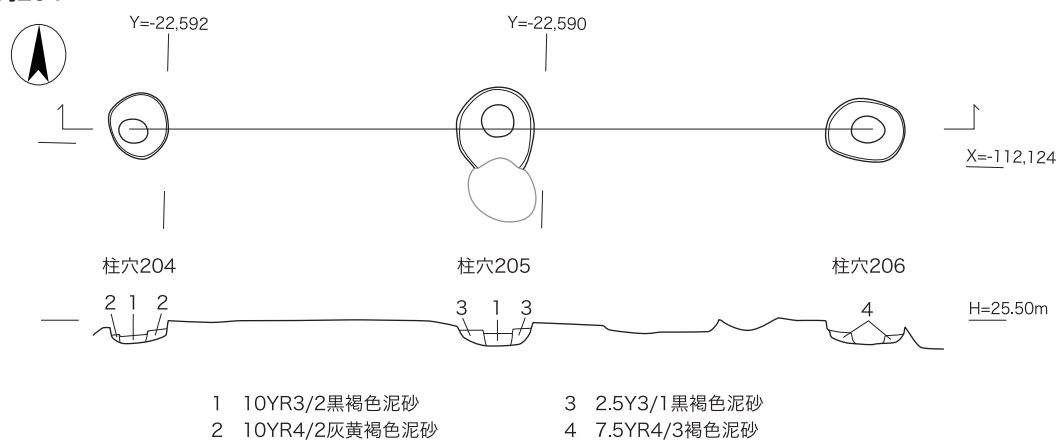


- 1 7.5Y2/1 黒色砂泥
- 2 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 炭化物・土器片含む (溝200)
- 3 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 粗砂混
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (地山)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 ϕ 5~8cm の礫含む
- 6 7.5YR5/6 明褐色砂礫 (地山)



図5 東区平面図、東壁・北壁断面図(1:100)

柱列204



柱列207

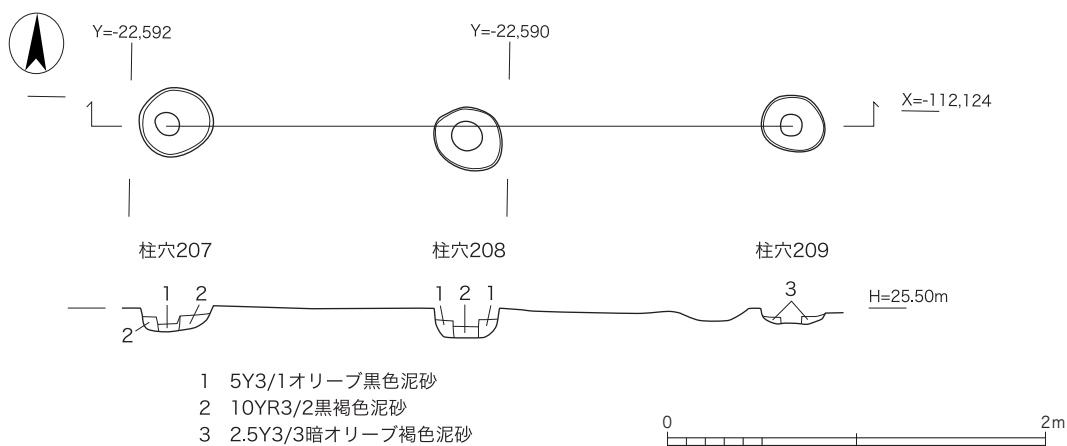
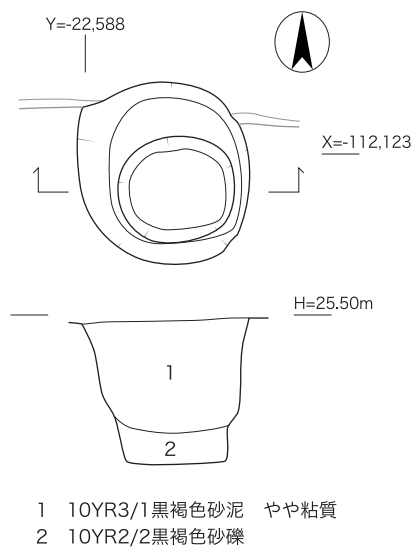


図6 柱列 204・207実測図(1:40)

井戸201



土坑221

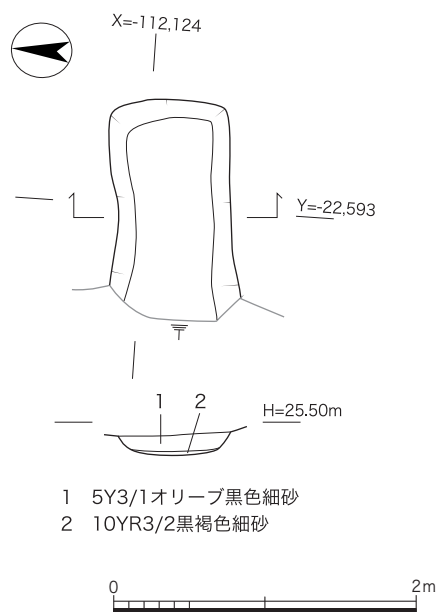


図7 井戸 201・土坑 221実測図(1:50)

西区の遺構（図 10、図版 4・5－1）

西区では鎌倉時代の遺構と江戸時代の遺構を検出している。

溝 300（図 10） 調査区の北部で検出した東西方向の溝である。東区で検出した溝 200 の続きと考えられる。規模は溝 200 と同じで幅 0.5m、深さ 0.1m、である。出土遺物は鎌倉時代の土師器と合わせて埴塼などの小片が出土している。

溝 301（図 10） 溝 300 の南側で検出した東西方向の溝である。幅 0.3m、深さ 0.1m である。

土坑 7（図 8、図版 5－3） 調査区の南東部壁際で検出した土坑である。直径 1.0m、深さ 0.55m の円形を呈すると考えるが東側は調査区外に延びる。底部中央に径 0.3m、深さ 0.1m のくぼみがある。平安時代末期から鎌倉時代の土器が少量出土している。

井戸 1（図 8、図版 5－2） 調査区の西側で検出した井戸である。本来は江戸時代の整地層上面で成立していたと考えられる。掘方の直径 1.4m、深さ 1.05m で、下部に径 0.7m の底を抜いた桶が据えられている。桶は腐食が激しく痕跡をとどめるのみとなっている。井戸の底部には江戸時代後期の土師器皿と砥石が折り重なった状態で納められていた。土師器皿は主に径 12.5cm、9.5cm前後、7.5cm前後の大・中・小の三種でいずれも完形品と思われ、大 1 点、中・小はそれぞれ十数点が認められる。これらの遺物はいわゆる「井戸じまい」といわれる井戸を廃棄する際の祭祀に用いられたものと考えられる。

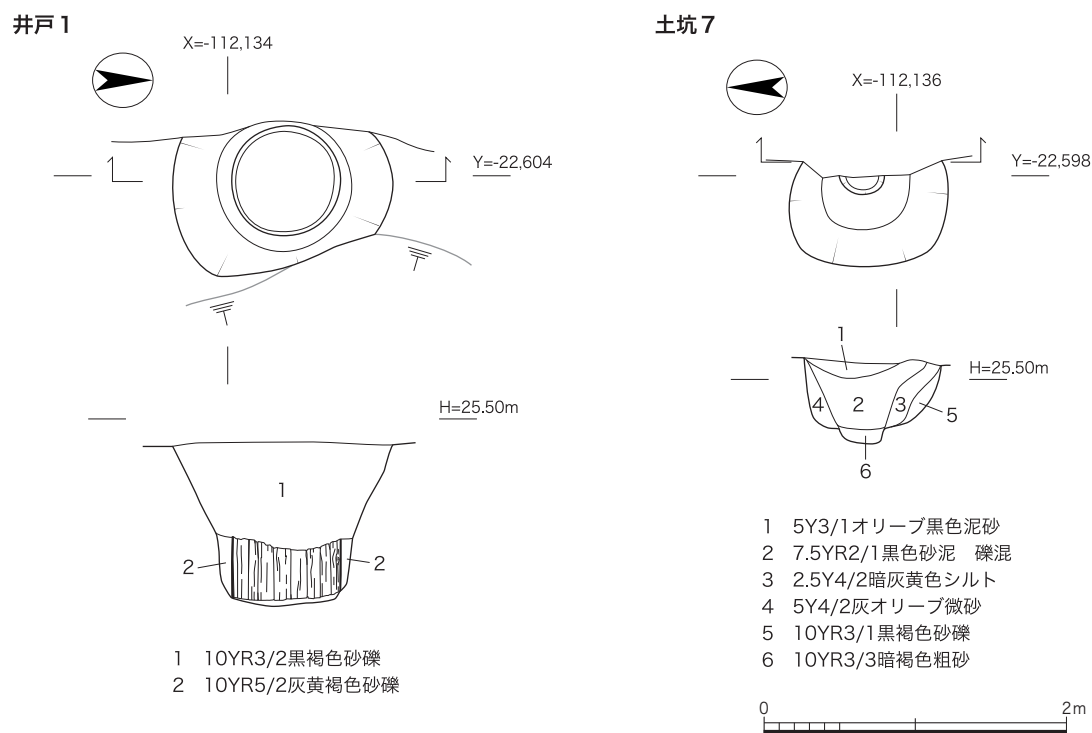


図 8 井戸 1・土坑 7 実測図 (1 : 50)

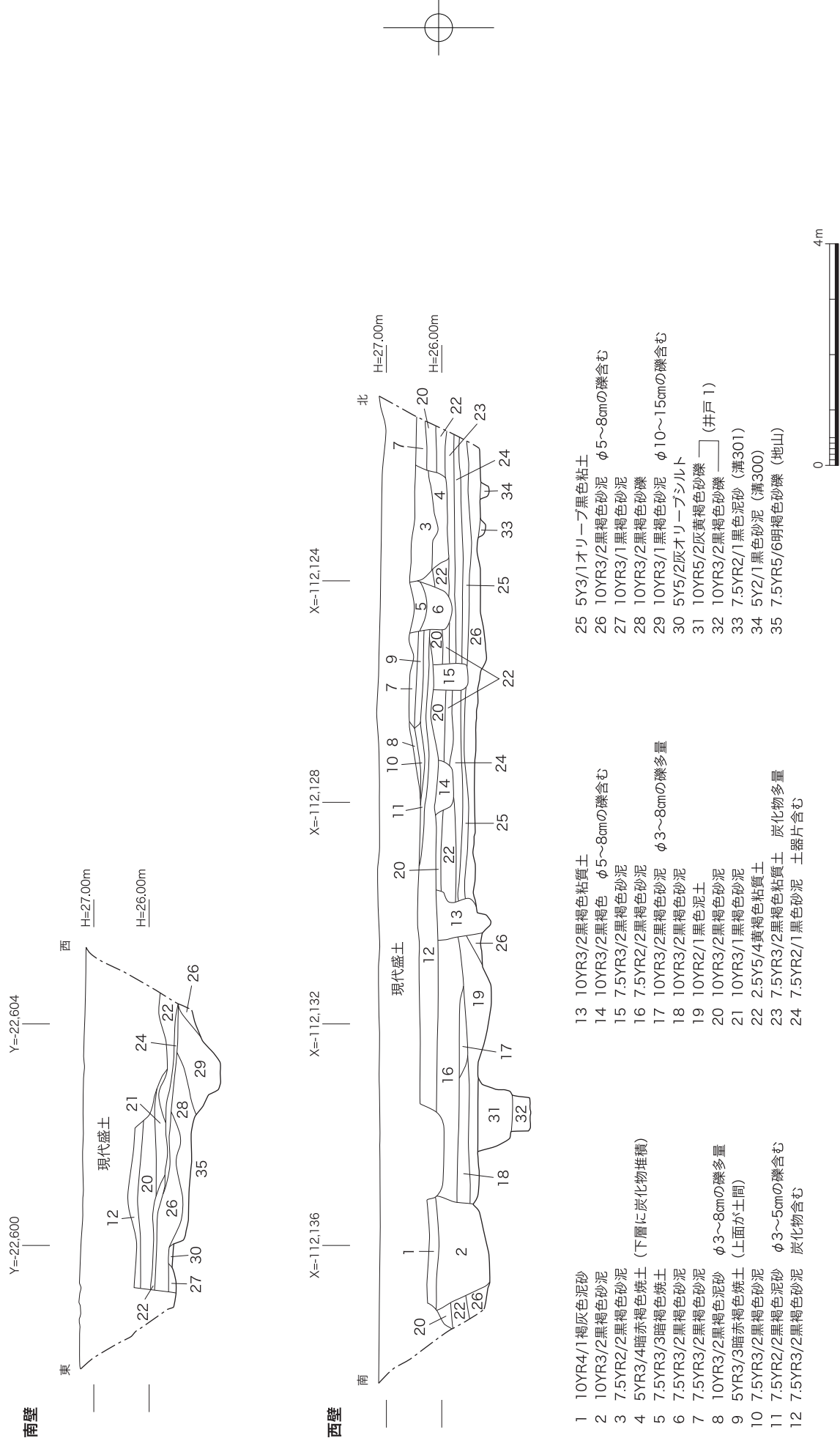


図9 西区南壁・西壁断面図(1:100)

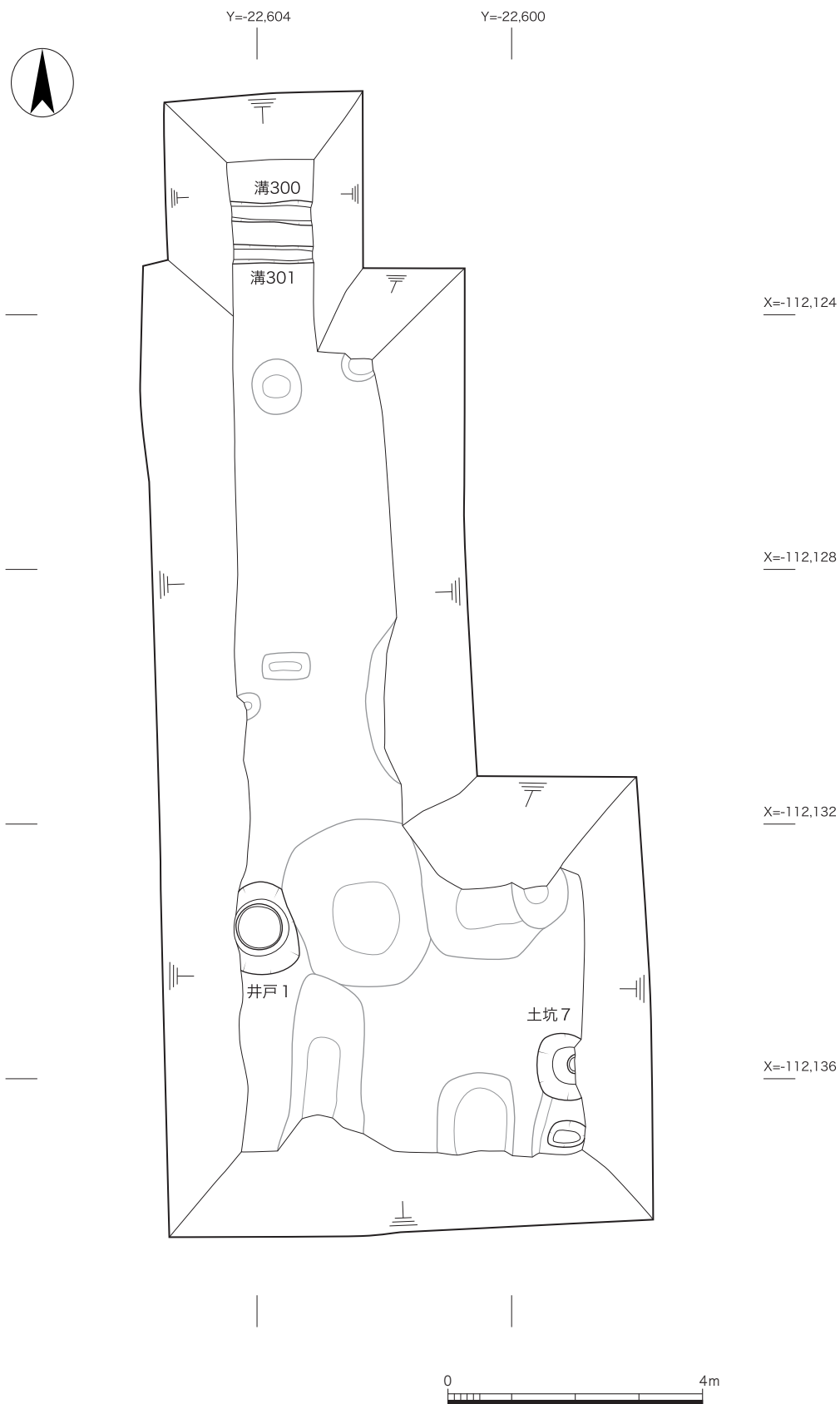


图 10 西区平面图(1:100)

第IV章 遺物

今回の調査では平安時代から近世にわたる遺物が出土している。大半は土器類で土師器・須恵器・焼締陶器・施釉陶器・青磁器・白磁器などがある。そのほかに、埴埴や鋳型・ふいごの羽口の破片、青銅製品、石製品などがある。時期的には鎌倉時代のものが多い。

1. 土器類

溝 200 出土土器（図 11、図版 6） 土師器の皿、鉢などが出土している。1 はコースター形の皿 Ac で平らな底部から内側に短く屈曲した口縁部からなる。2 ～ 7 は皿 N で平らな底部から内湾して立ち上がる口縁部からなる。口径 7.9 ～ 9.6cm、11.8cm、13.6cm の大・中・小がある。以上は平安時代末期から鎌倉時代（6A ～ C 段階）の土器である。8 は鉢でわずかに屈曲して立ち上がる体部から口縁部が残存している。外面にはハケの痕跡が認められる。内面は使用によって平滑に磨かれている。この種の鉢はいずれも内面が何らかの使用によって平滑に磨かれているのが特徴で、墨を作成するために油煙を受けて煤を集めるための道具という説がある（註 1）。

井戸 1 出土土器（図 11、図版 7・8） 土師器の皿が多く出土している。9 は皿 N で底部から内湾して立ち上がる口縁部からなる。口縁部外面には指抑えの跡が残る。11 ～ 17 は皿 Sb で口径 7.3 ～ 7.7cm、器高 1.1 ～ 1.4cm、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。18 ～ 24 は皿 S で口径 9.2 ～ 9.8cm、器高 1.4 ～ 1.7cm、平らな底部から外方に直線的に伸びる口縁部からなる。底部内面と口縁部の境にはへうによる圈線が巡る。25 は大型の皿 S で口径 12.5cm、器高 2.1cm 平らな底部から外方に直線的に伸びる口縁部からなる。底部内面と口縁部の境にはへうによる圈線が巡る。以上は江戸時代後期（14 段階）の土器である。

2. 金属製品（図 11、図版 8）

金属製品としては東区の井戸 201 から出土した火箸（金 1）がある。銅製で全長 22.3cm、最大

表 3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代～ 鎌倉時代	土師器・須恵器・瓦器・ 焼締陶器・施釉陶器・白 磁器・青磁器・瓦・埴埴・ ふいご羽口・銅製火箸		土師器 8 点、銅製火箸 1 点		
室町時代	土師器・焼締陶器				
江戸時代	土師器・焼締陶器・施釉 陶器・焼締陶器・染付磁 器		土師器 17 点、砥石 1 点		
合 計		3 箱	27 点（1 箱）	0 箱	2 箱

径 0.5cmで、根元から先端に向かってわずかに細くなり、先端はとがる。鎌倉時代のものである。

3. 石製品（図 11、図版 8）

石製品としては西区の井戸 1 から出土した砥石がある。粘板岩製で、長さ 20.2cm、幅 7.0cm、厚さ 1.2cmである。表面は平滑で使用により磨かれている。岩石の節理によって薄くはがれて裏面の残りは悪いが、原面が残る部分は使用によって磨かれている、仕上げ用の砥石とみられ石材のきめは細かい。

註 1 小森俊寛「丸底小鉢考」（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館『リーフレット京都 No. 133』
2000年

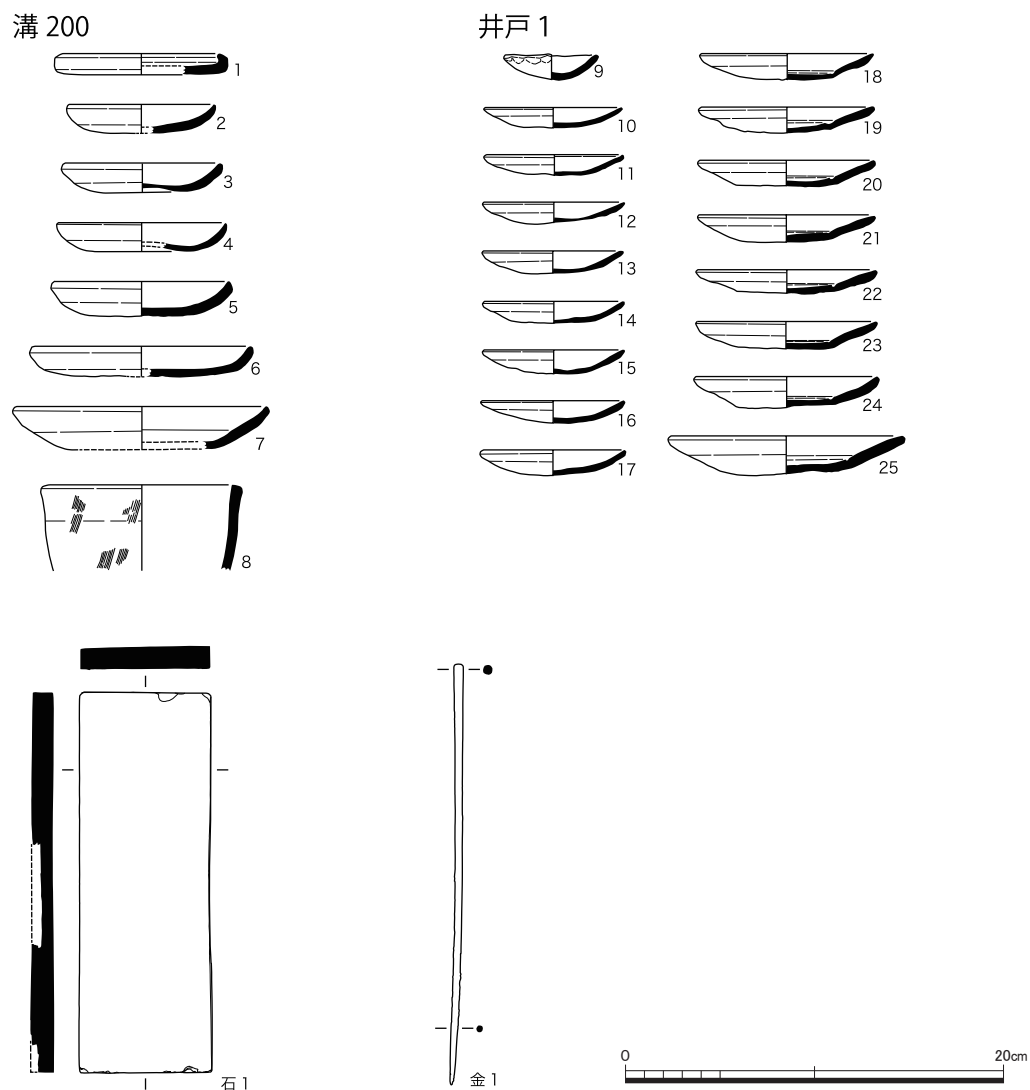


図 11 土器実測図(1: 4)

表 4 遺物観察表

図No.	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	色調	出土遺構	備考
1	土師器	皿 Ac	9.2	1.1	7.5YR7/2	溝 200	
2	土師器	皿 N	7.9	1.5	7.5YR7/4	溝 200	
3	土師器	皿 N	8.5	1.6	7.5YR7/4	溝 200	
4	土師器	皿 N	9.0	1.5	5YR7.4	溝 200	
5	土師器	皿 N	9.6	1.9	7.5YR7/4	溝 200	炭化物多量に付着
6	土師器	皿 N	11.8	1.6	7.5YR7/3	溝 200	
7	土師器	皿 N	13.6	2.3	10YR7/3	溝 200	
8	土師器	鉢	10.7	4.5 残	2.5YR6/4	溝 200	内面摩滅
9	土師器	皿 N	5.0	1.4	10YR8/2	井戸 1	
10	土師器	皿 Sb	7.3	1.1	10YR8/4	井戸 1	
11	土師器	皿 Sb	7.4	1.1	7.5YR7/4	井戸 1	内面に鉄分付着
12	土師器	皿 Sb	7.5	1.2	10YR8/3	井戸 1	
13	土師器	皿 Sb	7.5	1.2	7.5YR7/6	井戸 1	
14	土師器	皿 Sb	7.5	1.2	10YR7/4	井戸 1	内面に鉄分付着
15	土師器	皿 Sb	7.5	1.3	7.5YR7/4	井戸 1	
16	土師器	皿 Sb	7.3	1.1	10YR8/3	井戸 1	外面に鉄分多量に付着
17	土師器	皿 Sb	7.7	1.4	7.5YR8/3	井戸 1	内外面に鉄分薄く付着
18	土師器	皿 S	9.2	1.4	7.5YR7/4	井戸 1	外面に鉄分付着
19	土師器	皿 S	9.3	1.4	10YR8/3	井戸 1	
20	土師器	皿 S	9.4	1.4	7.5YR8/3	井戸 1	内外綿に鉄分薄く付着
21	土師器	皿 S	9.4	1.5	10YR8/4	井戸 1	外面に鉄分付着
22	土師器	皿 S	9.5	1.3	10YR8/3	井戸 1	内外面に鉄分薄く付着
23	土師器	皿 S	9.7	1.4	10YR8/4	井戸 1	内外面に鉄分付着
24	土師器	皿 S	9.8	1.7	10YR8/3	井戸 1	外面に鉄分付着
25	土師器	皿 S	12.5	2.1	7.5YR8/4	井戸 1	
石 1	石製品	砥石	長 20.2	幅 7.0	5Y7/1	井戸 1	厚さ 1.2 粘板岩
金 1	金属製品	火箸	長 22.3	最大径 0.5		井戸 201	銅製

第V章 まとめ

今回の敷地には調査前にコンクリート製の建物が存在しており、その影響で東区のかかなり部分は本来の遺構面が削平されていた。一方、西区でも江戸時代の湿地状堆積が広範囲に広がり同様に本来の遺構面が削平を受けていた。そのような状況下にもかかわらず、平安時代末期から鎌倉時代を中心とした遺構が検出できた。以下、今回検出した遺構と遺物について若干の考察を加えてまとめる。

条坊関連の遺構と宅地について 今回の調査区は平安京左京八条二坊九町の北西の端にあたる。東区では七条大路に面した宅地、西区では七条大路と堀川小路の交差部分が推定される。平安京条坊データ（註1）によれば七条大路南築地と堀川小路東築地の交差部は国土座標で Y=-112,123.94、X=-22,603.96で西区の北側にあたる（図12）。調査ではこの位置に築地に関係するような遺構は認められなかった。一方、東区においては九町の北築地にあたる位置に柱列204・207を検出している。しかしながらこれらの柱列の柱穴は規模が小さく、柱間も狭い、さらに短い時間で建て替えられている状況から築地に伴うものではなく小規模な建物に伴う柱列と判断している。平安京域では平安時代後期から鎌倉時代にかけて、築地が取り払われ道路に面した町屋型の建物が成立していく（註2）。こうした状況を鑑み柱列204・207は町屋型の建物の北側柱列であり南側に点在する柱穴と組み合わせるとは建物を構成するものとみている。そしてその北側にある東西溝200・300はこの時期の七条大路の南側溝と考えられる。この溝を境に北側に柱穴が検出されないのは路面である証左であろう。延喜式の京程による規格によれば七条大路は「大路広十丈」なので、築地基底部幅六尺（約1.8m）、犬走り幅五尺（約1.5m）、側溝幅四尺（1.2m）である。したがって南側溝は築地芯から北へ3mの位置に存在しなければならないが、溝200・300は北へ約1.5mの位置にある。側溝の位置の違い、町屋型建物の存在からこの九町の周辺では鎌倉時代には街が再開発されていた可能性があるだろう。

また、既往の調査歴でも述べたが調査地に周辺では鎌倉時代から室町時代にかけての鋳造や鍛冶遺構が多く検出されており、中世の七条町に関係する遺構と考えられている。今回の調査でも側溝から少量ではあるが埴塼や鋳型・ふいごの羽口の破片が出土しており、鋳造に関する遺構が近くに存在したことを物語っている。当地も七条町に一角に組み入れられていたものとみられる。ただし、今回検出した遺構は室町時代のものは少なく、室町時代には衰退しているようである。

井戸1出土遺物 西区の井戸1からは土師器皿の一括遺物が出土している。これらの皿は完形品で井戸底にまともって置かれており、その下には井戸底に堆積していたと考えられる泥や不純物が見られない。このことは井戸底を清掃してから皿を収めたことを示している。さらにその上には一気に埋め戻された土層が堆積していた。こうした状況から土師器皿は井戸を廃棄するための「井戸じまい」と称する祭祀に伴うものと考えている。

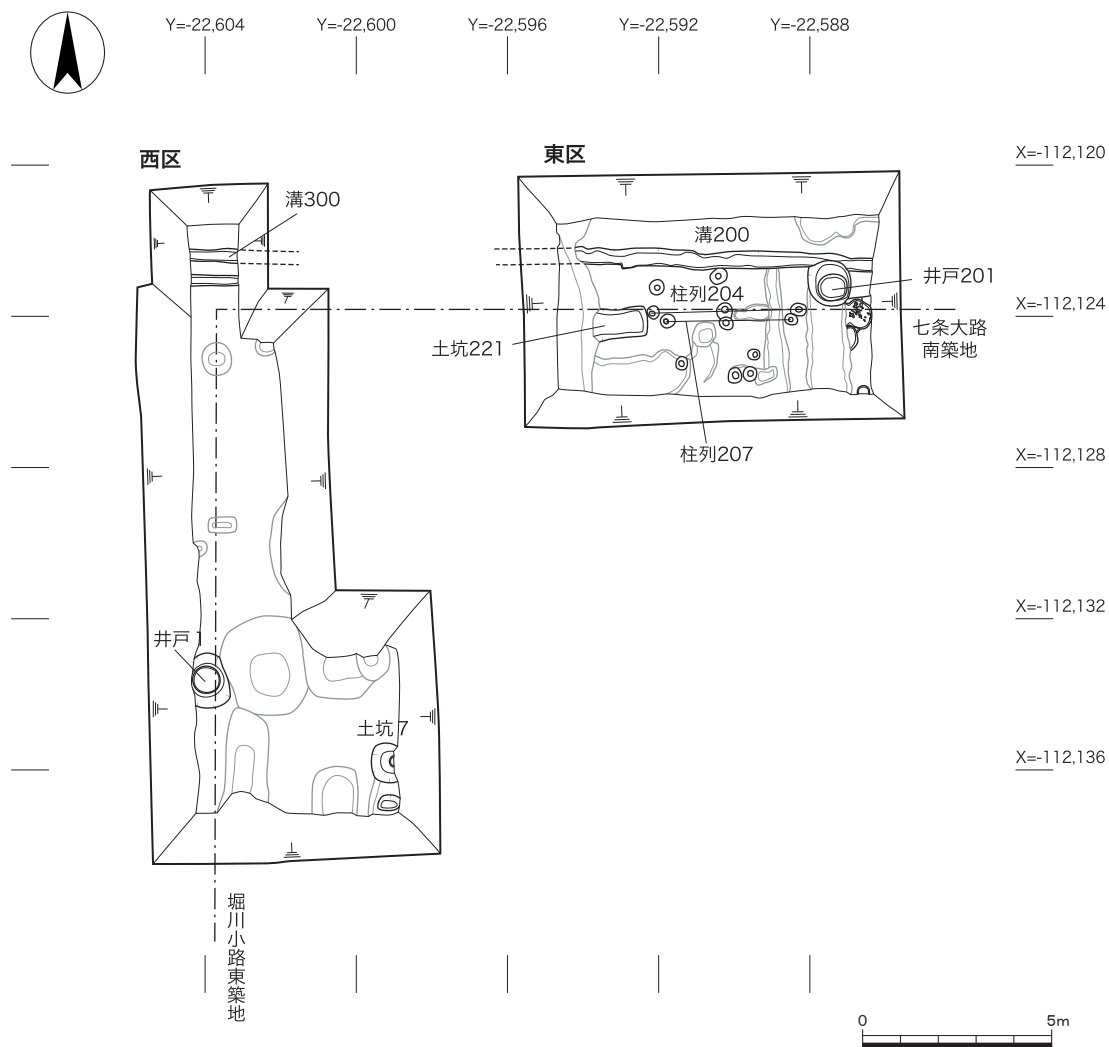


図 12 調査区条坊復元図(1:200)

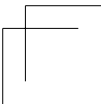
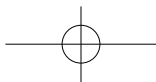
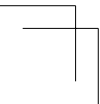
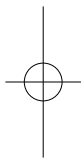
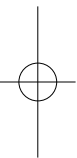
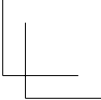
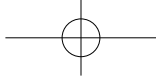
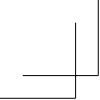
井戸じまいの祭祀は長岡京期にはすでに始まっており、室町時代には広まっていったようで、当時は大石を入れたり、ぐり石を詰め込んだりして封じ込めることが目的だったようである（註3）。現在でも「息抜き」と称して節を抜いた竹筒や塩化ビニールの管を立ててお祀りする例が残されており、井戸じまいの祭祀にも時代によって変化が認められる。今回検出した井戸1は江戸時代後期の祭祀例として貴重なものである。

最後に、今回は鎌倉時代を中心とした遺構群を確認することができ、当時の七条大路に面した町屋の状況を確認できたことは大きな成果であった。ただ、調査区の制約で条坊関係の遺構の確認が十分にできなかった。とくに堀川小路との関係がつかめなかったことは残念であった。平安京の堀川小路は大部分が現在の堀川と堀川通に重なって調査をすることが困難な遺構であり、堀川通が東にずれている六条以南の地は今後も注意が必要であろう。

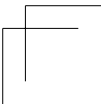
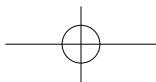
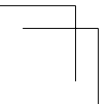
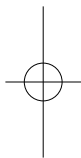
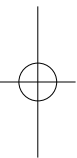
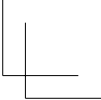
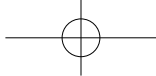
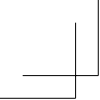
註 1 （公財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平安京の条坊復元データ

註 2 野口 徹「平安後期の京都における町屋の展開―町屋の形成過程（上）―」『建築史学第 1 巻』1983年

註 3 久世康博「井戸を埋める」（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館『リーフレット京都 No. 127』
1999年



版 图





1. 東区平面オルソ画像（左が北）



1. 東区全景（西から）



2. 溝200（西から）



3. 柱列204・207（東から）



1. 井戸201（南から）



2. 土坑221（西から）



3. 西区拡張部（南から）

図版4
遺構



1. 西区平面オルソ画像（上が北）



1. 西区全景（南から）



2. 井戸1（東から）



3. 土坑7（西から）



溝200出土土器





井戸1出土土器



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



石1



金1

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさぎょうはちじょうにぼうきゅうちょうあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書 籍	平安京左京八条二坊九町跡発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 8 集							
編著者名	吉崎 伸							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2026 年 2 月 28 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京八条二坊九町跡	京都市下京区七条通東堀川西入八百屋町 2、3、11、19	26100	1	34 度 59 分 21 秒	135 度 45 分 9 秒	2025 年 9 月 29 日 ～ 10 月 17 日	171.5 m ²	ホテル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京八条二坊九町跡	都城跡	平安時代末期～鎌倉時代	道路側溝・柱列・井戸・土坑	土師器・銅製火箸		平安時代末期から鎌倉時代の七条大路南側溝を検出した。		
		江戸時代	溝	土師器・砥石				

平安京左京八条二坊九町跡 発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>
コンピュータ・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目 273 番3
TEL 075-462-5411
<https://www.comsys-kk.co.jp>

発行日 2026 年 2 月 28 日